

32 一人旅

星野博美

三週間あまり、スペインのアンダルシア地方と北モロッコに出かけてきた。いつもの通り、一人旅だ。

別に確固たる目的があったわけではなかった。いつもそうなのだが。なんとなく、現地の風景を見てみたかった。

とはいえ、それだけの理由では、わざわざ航空券を購入する理由にはならない。本や地図だけで想像する二次元世界を、現実の空間に身を置

くことで三次元世界に昇格させたい。それが大きな理由だったかもしれない。

今回の旅行は、行く前からへんな感じだった。誰から強制されたわけでもなく、取材というミッションを与えられたわけでもなく、完全に自由意志で決めた旅行だった。それなのに、航空券を買った途端に行きたくなくなってしまったのだ。

値上がりを恐れ、出発想定日の一か月以上も前に航空券を押さえたのが、そもそもの間違いだった。

もともと旅行があまり好きではなく、先の予定を入れることすら好まない人間が、そんなことをすべきではなかった。出発までの猶予期間中に、気持ちを立てなおすどころか、厭旅感がすっかり醸成されてしまい、

しまいには幼稚園に行きたくないと言った。メソメソする幼稚園児のようになつていた。

両親や姉は長年の経験から、私のそんな面倒くさい性格を熟知して、出発が迫ってジタバタするさまを慰めてくれるのが常だった。しかし今回はあまりに行きたくないと大騒ぎしたので、「へんな奴！」と、しまいには匙を投げられた。

そしてその後ろ向きな気持ちピークに達したまま、出発の朝を迎え、いやいや出て行ったのだった。

一度出てしまったら、もう後戻りはできないので、一生懸命旅行をした。しかも今回の航空券は、入りをマラガ(スペイン)、出をラバト(モ

ロッコ)にしてしまったため、泣いてもわめいても、本当に前に進むしかない。退路はないのだった。

一つの街から次の街へバスで移動する間は、貴重な空白だ。風景を見ながら、いろんなことを振り返る時間が与えられる。

モロッコの古都フェズから、現在の首都ラバトへの想定所要時間は三時間半。この旅を総括するには、ちょうどいい機会だった。

なぜ今回はこれほどジタバタと醜態をさらしたのだろうか。

二十代、三十代と、確かに旅行の多い日々を送った。ところが、ある時期を境にぱたりと行く気が失せた。二〇〇六年から二〇一六年までのパスポート——ちょうど四十代がすっぱり当てはまる——は、自分史上、最高に使わなかった代物だ。更新することさえ迷ったほど、海外から心

が離れていた。

当時の状況は、これまで歩んできた道に自信がなくなり、一步も前に進めなくなった、といえは近いだろうか。日常を立てなおすことが最優先事項で、異文化に関心を抱く余裕が持てなかった。一人旅は、肉体にも精神にも多大な負荷がかかる。ある程度健全な状態を保てていない時には、行くべきではない。

もう一つの理由は、猫だった。老境に入った猫たちを置いて、後ろ髪を引かれながら旅行するぐらいなら、家にいたほうがいい。それは生活から旅を排除する、十分すぎる理由になった。

確かにそう思っただけはいたのだが、一方では、異文化に興味を失った現状を素直に認められず、「大切な猫のため」という大義名分に飛びつい

た側面があったことも否定はできない。

猫がとうとう一匹もいなくなり、二〇一六年、再びパスポート更新の時期がやってきた。このパスポートは迷わず更新した。それから一年半で、モンゴル、トルコ、スペイン、モロッコへ渡航した。客観的には「暗黒の四十代」から、「トンネルを抜け、ようやく外向きになった五十代」のように見える。しかし自分ではそれほど明るい話題だとも思っていないところが、実に面倒くさい。

「明るい五十代の幕開け！ そう自分に言い聞かせたいだけだよね」と、冷たいツツコミを入れる自分がいる。

「いいじゃないか。まずは自分をだまさないで、他人もだませないのだから」

そう擁護する、もう一人の自分もいる。

実際、そう捨てたものではなかった。今回の旅行はまるで、軌道修正能力回復強化合宿のようだった。

旅は、際限ない選択の積み重ねだ（洗濯の積み重ねでもあるが）。どこへどのような手段で行き、何を食べるかを決め、トイレのことを考えながら水分摂取量をコントロールし、次の一手を再び考える。未体験であるが故に結果がまったく想定できない選択を、これでもか、これでもかと迫られる。何か一つ失敗をし、それをすぐさま学習して修正しないと、同じ失敗ばかりを繰り返すことになる。「なんでこうなんだ！」と異文化に対して文句を言っても始まらない。状況を受け入れ、自ら適応するしかない。

それを強制的に繰り返せば、当然、おのずと旅の技術は上がっていく。学習・修正能力がまだ残っていることを知ったのは、大きな慰めになった。

「いや、まだまだいける。この調子なら、五十代といわず、六十代一人旅だって可能」と、自分に媚を売る。

「それが何なんだ」と、また冷たいツツコミが入る。

「旅先でできたところで意味はない。人生に生かさなければ、何の意味もないのさ」

そうやってバスの中で、鼓舞する自分とツツコミを入れる自分が勝手に漫才を始め、ニヤニヤしたり涙ぐんだりを繰り返す。満席になった車内で、相当気味の悪い乗客だったに違いない。

中年一人旅は本当に面倒くさい。苦渋をなめ続けた結果、すっかりグレてしまった墮天使みたいなもう一人の自分が常に肩に乗っていて、興ざめすることばかり囁き続けるのだ。

どこかへ行ってしまってくれないか？

君がいると、旅にロマンが感じられないのだが。

しかし、奴の言うことにも一理はあるのだった。

若い頃、旅に陶酔できたのは、冷や水を浴びせかけるこんな存在がいなかったからだよな、と思う。

私はすでに知っているのだ。

旅の一つや二つで変わるほど、人生は柔らかくないということ。

旅先に、一発で人生を変えるような出会いもないということ。

見たこともないほど素晴らしい星空。有無を言わさない風景。信じられないような悪人や善人……。旅は、ものすごい濃度の非日常因子を体内にぶちこんでくる。いったんはそれを受け入れ、その濃度に合った自分に修正する。旅先の生存本能がそうさせるのだ。

ところが日常に戻ると、その濃度は毒にもなりかねない。大慌てで大量の水を飲み、血中濃度を下げていく。排出する必要はない。ただ、体内でおとなしくしていただく。それが日常の生存本能だ。

日常の希釈力というのは、まったくすごいのである。

車内のひとり漫才は、ツッコミ方の圧倒的勝利で終わりそうに見えた。しかしそう学習したのもまた、旅を重ねた結果なのである。旅の経験

がそれほどなければ、私はいまだに、瞳をキラキラさせてやまなかつた
だろう。

たかが旅。されど旅。

されど、たかが旅。

さつきまで左右に広がっていたオリーブ畑はいつしか消え、車窓の風景が賑やかさを増した。ラバトが近づいている。分裂している場合ではない。人格を一つに統合して、旅に集中しなければ。

「この経験が、また何かに役立つこともあるだろう」

そんな当たり障りのない結論で手を打ち、降り支度を始めた。